

特 集

——シンポジウム「ヴィクトリア朝の／と人形(劇)」

【研究ノート】パンチ&ジュディのヴィクトリア朝

岩田 託子(中京大学)

はじめに——日本での本質受容

(I) ヴィクトリア朝パンチ&ジュディの特徴

1. 木偶性 2. ストリート性 3. ぶくぶく性

(II) ヴィクトリア朝投影文化のなかのパンチ&ジュディ

1. 幻灯文化に現れる「パンチ」 ①特異性二点

②種板分類と「パンチ」 i. パノラマ種板 ii. 細工種板 iii. スタンダード種板

2. 映画へあと一歩の幻灯での「パンチ」 ①ライフモデル種板 ②ディゾルヴ種板

3. 初期映画に現れる「パンチ」 ①フィクション映画「パンチ&ジュディ」

②映像の魔術師メリエス作品での「パンチ」

i. 「パンチ&ジュディ」と呼ばれた「人形劇場でハチャメチャ」

ii. 「パンチ」従兄ポリシネールが活躍する映画 iii. 映画「幻灯」の「パンチ」

おわりに

はじめに——日本での本質受容

パンチ&ジュディとは、イタリアのコメディア・デラルテに遡り400年近い歴史をもつ英国の伝統人形劇である。あらすじは悪漢主人公パンチが妻ジュディと子をはじめ、警官、医者、教区吏、絞首刑執行吏、鰐、幽霊、悪魔まで、ありとあらゆる敵対者をやっつけてしまう。パンチ人形の頭は木で、どんぐり眼に鷺鼻、しゃくれ顎、太鼓腹に背中には瘤。赤と黄色の道化服と道化帽を身につけている。基本は、人形遣いが一人入れる箱舞台で、両手にグローブのようにはめて遣う。したがって、舞台上にはパンチ

ともうひとつキャラクターが登場し、その相方はパンチの棍棒にめった打ちにされる。英国では、単純で暴力的なこの人形劇が現在に至るまで親しまれ、また、積極的に子どもに見せることで継承しようとしている。

遠く離れた日本にありながら、驚嘆をもって肯定的にパンチ＆ジュディを受け止めた三人、野中涼、鶴見俊輔、水田外史の言葉を引いておく。

野中涼は1974年に『英語青年』1500号記念号において、項目「Punch and Judy」を担当し、60余人の執筆者のなかで異彩を放った。

とほうもない殺人劇なのに、さばさばした後味だ。たしかに一つの巨大な冗談といったものであり、イギリス文学の中にちゃんとした伝統としてつづいている Nonsense 文学の代表作として考えることもできる¹。

当時まだ日本では知る人の少ない人形劇を、筋の展開を詳しくなぞった上で、パンチを「土俗的なにおい」「度しがたい無頼漢」「ルネッサンスの落し子」「アナキスト」「ダダイスティック」「ついに挫折しないルネッサンスのただひとりの英雄」「恥も外聞もない破壊者」「あっけらかんとした殺人者」とさまざまに呼び、英国文化に「こういう恥も外聞もない破壊者…を、いつまでも愛しながら追放せずにいる」深淵を覗き見ている。

その数年後、鶴見俊輔がとらえたパンチ＆ジュディは、まさに野中涼の延長線上にあった。

悪人はけっして仕合せになることができないという、ひろく知られている格言に反して、パンチは幸福な悪人である。…そういう人間がいるという冗談を何としてでもおたがいの間に保ちたいという願いが、イギリス人の間にはあった²。

野中・鶴見による洞察と重なるコメントを、実演者の水田外史がパンチ＆ジュディを英国で実際に観てのちに残している。

動きの派手なパンチ劇。それが正義が悪に勝つというおはなしでもな

く、やさしさや愛が尊いっていう劇でもない。

…

こういう劇を子どもの誕生日にするんだから。日本では考えられないことだ³。

以上三者は、パンチ＆ジュディに英國文化のエッセンスを見る立場が共通している。

さらに水田外史は、ブーケ人形劇場時代に耳にした主宰者川尻泰司の言葉を次のように記している。

パンチ棒を持って、コテンパンに相手を叩きのめす、というストレートに攻撃的なものをしなければいかん…そこに手のエネルギーが出てくる、そこに魅力がある⁴

日本で手遣い人形を模索し実演するなかでも、この言葉を水田は反芻してきたように見える。

次に、体験したパンチ＆ジュディを吸収し、自己の表現を生み出した例を記しておく。少年期をロンドンで過ごしたことでパンチ＆ジュディに出会った山根能文は、長じてのち自ら人形劇団テアトル・ップペを立ち上げ1951年には実演に至った⁵。それまでの日本におけるパンチ＆ジュディが文献にもとづく上演であったのに反して、山根は英國での体験から実演を目ざした、おそらく初めての例と考える。

以上からパンチ＆ジュディは日本において認知され理解されているといえる。本稿ではパンチ＆ジュディをヴィクトリア朝文化の文脈の特性のなかで見直してみたい。(I.)「ヴィクトリア朝」のパンチ＆ジュディの特徴を確認する。パンチ＆ジュディの歴史は、ヴィクトリア朝を遡り、サミュエル・ピープスの日記での目撃記録から1662年5月9日を誕生日としている。一種の「記念日カルト」⁶にのっとり、この日を祝ってきた。しかしながら、それ以前の英國土着の人形芝居と、ヨーロッパ各地に伝播したイタリア起源の古典劇に由来する人形劇の融合から始まった、と理解されている。始まりについての掘りおこしはここでは試みず、「ヴィクトリア朝」に限定す

ることで見える特徴を記したい。

ついで(II.)投影文化をヴィクトリア朝文化の重要で大きな領域と考える立場から、その諸相にパンチ&ジュディの存在を確認していく。ヴィクトリア朝投影文化の一つの縮図にするべく、幻灯と映画のさまざまなコンテンツに頻繁に登場するパンチ&ジュディを追跡する。

(I.) ヴィクトリア朝パンチ&ジュディの特徴

ヴィクトリア朝パンチ&ジュディの上演再現は難しい。周辺資料を集め、想像することしかできない。最重要資料を4点あげる。まず、最初に上演者の台詞をとどめたジョン・ペイン・コリアーによるテクストにジョージ・クルクシャンクが挿画をつけた書物(1828)。女王即位以前の出版であるが、ヴィクトリア朝をつうじて版を重ね、その魅力と影響力から、今に至るまで一番の定番資料である。次いでチャールズ・ディケンズと挿絵のジョージ・キャタモールが活写した『骨董屋』(1841)。そして、女王即位の4年後に創刊され変遷を経ながら21世紀まで続いた諷刺雑誌『パンチ』(1841-2002)。顔役としてパンチは新刊ごとに人々の目を惹いた。最後に、ヘンリー・メイヒューの調査記録(1851, 1861-2)である。これらに立ち返りながら、ヴィクトリア朝パンチ&ジュディをとらえなおしてみる。

目下ウェブ上の写真や動画で見るパンチ&ジュディを、いったん忘れて時間を巻き戻し、ヴィクトリア朝の特性を探すと3点が浮かぶ。1. 木偶性、2. ストリート性、3. ぶくぶく性である。それぞれを解きほぐしていく。

1. 木偶性

現代のパンチ&ジュディ人形は派手な極彩色がめだつが、それは、鮮やかな色彩の塗料も布地もふんだんに手に入る恩恵だろう。英国の博物館にヴィクトリア朝から伝わる人形は素朴で粗野。くりかえしの使用によって色が剥げ損傷をこうむったことが明らかな、木地がわかる木偶が多い。それらは、かの有名なクルクシャンク挿画に似ていない。また、現代のパンチ&ジュディに、クルクシャンク挿画に似るものも、実はほとんど無い。このギャップは考察に値する。

例外的に似ているのは、クルクシャンク挿画をもとに作ったと告白しているアメリカの人形劇人ビル・ベアード作品である⁷。【図1】そして、ひと



【図1】ビル・ペアードがクルクシャンク挿画をもとに製作したと語るパンチ&ジュディ



【図2】斎藤徹製作ひとみ座のパンチ&ジュディ

み座が所有する人形【図2】がクルクシャンクを直に思い起こさせる。製作者斎藤徹は英國の劇人形に倣い創ったのではなく、製作当時ひとみ座に浸透していたクルクシャンク画から創ったか⁸、もしくはペアードに著書を通じて倣った可能性も否定できない。



【図3】ブライアン・クラーク師とパンチ



【図4】ブライアン・クラーク師作
「ピッチーニのパンチ」

最もクルクシャンク挿画に近いヴィクトリア朝のパンチ人形は、ディケンズ『骨董屋』のキャタモール挿画である。挿画には挿画のコードがあり踏襲されうる、ということだろう。

上演人形は、クルクシャンクとは別ラインで作られてきた、といえる。劇人形パンチ&ジュディには独自のコードがあり、そのコードは挿絵として完璧なクルクシャンクやキャタモールの挿絵からは少々異なるようだ。



【図5】コドマン家のパンチ頭

上演者で人形も彫るブライアン・クラーク師の作品は、このことを明瞭に示す。ふだん遣う人形【図3】と、「ピッチーニのパンチ】【図4】と本人が呼ぶクルクシャンクが描いたパンチに倣う人形は大きく異なっている。自ら生産ラインを二本設けたのだ。

三代続いたパンチ上演者コドマン家の初代は1864年創業、1910年没。【図5】は20世紀初頭のものと思われるが、所蔵館で19世紀初頭とキャプションがついたのは、古びた昔のものとの印象を強く得たゆえかもしれない。100年位前であっても、今とはずいぶん面相が違うので、これを200年前の人形と誤解したようだ。

2. ストリート性

今パンチ&ジュディを見ることができるのは、主催者と契約した場所・時間で上演されるからだ。現在は、ハプニング的なストリート上演がなくなったと云える。ヴィクトリア朝に戻りメイヒューのインタビューを手がかりにすると、上演形態を二種に分けられる。支払うことのできる層に呼ばれて上演する場合と、通りすがりに足を止めて小銭を投げる層へのストリート上演である。目の前の観客に受けるべく、上演は変えたと説明している⁹。

ストリート上演擁護派の代表プランチャード・ジェロルドの言葉を次に借りる¹⁰。「小さい子は前に押しやり仕事中の男も女も遠巻きに見る」様子をとらえ、「いちように顔色の悪い」生活に疲れた観客たちが、ひと時、



【図6】ギュスターヴ・ドレ 168番

仕事をさぼって笑いを求める姿をギュスターヴ・ドレがとどめている。【図6】仮にパンチ&ジュディが「説教垂れたり、大義を説いたり、ウイットに溢れたりすると、立ちどまってた牛乳配達娘も特ダネ新聞配達も仕事に戻ってしまう」と危惧するのは、ジェロルドがストリート上演ならではの魅力をあくまでも守りたいからだ。

3. ぶくぶく性

ヘンリー・ジェームズが長編小説について形容した“large, loose, baggy monsters”「でかくて、ゆるくて、ぶくぶくの怪物」¹¹とは、現在からヴィクトリア朝パンチ&ジュディをかえり見ると、そのままあてはまる。上演者が遣うキャラクターが、まず多かった。社会背景や流行のもと、話題の人物や一過性のものもあり、演者によって導入され上演の個性をつくったキャラクターもある。その後、定着するに至った例もある。

現在のパンチ&ジュディは上演時間30分足らずが多い。上演を収録しディスクで販売する演者は複数いるが、たいてい20~30分というところだ。上演時間が短くなったぶん、相応に相方の数は減っている。

今めったに見かけなくなったのは「(麗しの)ポリー、隣人、廷臣、ジム・

クロウ、スカラムーシュ、盲人」など。上演・画像・文献から判断して、325年祭（1987）から350年祭（2012）の四半世紀の間に共通して用いられたキャラクターが「ジュディと子」の他は「警官、医者、悪魔、鰐」である。今も演者によっては使う例が「道化ジョーイ、拳闘家、教区吏、死刑執行人、馬ヘクター、トービー犬、幽霊」などである。もちろん、いつも全部を用いるわけではない。

マイヒューのインタビューに応じたパンチ上演者は、ジュディと子で第一幕。牢獄での死刑執行人と悪魔で第二幕が原型と捉えており、実入りを増やすにはキャラクターを増やし上演を長くすると説明していた¹²。

投入する相方を増やしパンチとからめれば、全体が「でかくて、ゆるくて、ぶくぶくの怪物」、上演時間は長く「でかく」なり、キャラクターどうしのつながりは「ゆるく」、全体は「ぶくぶくの怪物」になりやすい。

（II.）ヴィクトリア朝投影文化のなかのパンチ&ジュディ

幻灯機による投影と映写機による投影を別物ではなくスクリーンへの投影^{screen practice}¹³と連続して捉え、このような投影文化をヴィクトリア朝文化における大きな要素であると考えている¹⁴。世界的に見ても、幻灯文化の最盛期はヴィクトリア朝英國であった¹⁵。そして、映画が誕生した1895年、英國はヴィクトリア朝であった。幻灯種板に採用されたパンチ&ジュディやフィルムが扱ったパンチ&ジュディを例として、ヴィクトリア朝の投影文化を概観することで、「パンチ&ジュディのヴィクトリア朝」の別の側面を見ていきたい。

ヴィクトリア朝のパンチ&ジュディ上演を追体験することは不可能だが、人形劇以外の芸術領域でも他メディアにおいても頻繁に現れたパンチ&ジュディの痕跡は今も目にできる。その名を冠した雑誌『パンチ』誌が代表で、他にも、絵画、挿画、絵本をはじめ各種印刷物、広告や日用品などさまざまな意匠に取り入れられた例は枚挙にいとまない。投影文化を一領域として加え、検討していく。

パンチ&ジュディが偏在し、投影文化にも場を占めた時代としてヴィクトリア朝をとらえている。ヴィクトリア朝投影文化の盛んな諸相を、コンテンツがパンチ&ジュディである例から記述を試みる。ただ、人形劇以外

の領域では、パンチ＆ジュディとして現れる場合だけではなく、パンチ単体で現れる例が多い。パンチ単体で現れる場合を、本稿では総称として「パンチ」と言及する。雑誌『パンチ』が好例で、トービー犬がジュディに替わってお供した¹⁶。加えて、イタリアの元祖ブルチネッラから伝わった先々で名を変えたヨーロッパの従兄たちも、総称としての「パンチ」を入れる。なかでもフランスのパンチにあたるポリシネールは、フランスが映画を産みだした国であるだけに登場がめだつが、英語圏は後述のように「パンチ」の活躍と捉えたのだ。

以下1.幻灯文化に現れる「パンチ」、2.映画へあと一歩の幻灯での「パンチ」、3. 初期映画に現れる「パンチ」を見ていく。

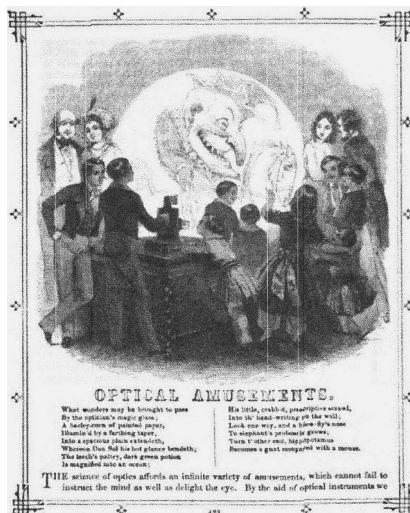
1. 幻灯文化に現れる「パンチ」

①特異性二点

幻灯文化に頻繁に登場する「パンチ」を、投影用の種板から検証するが、本題に入る前に特異な二点にふれておく。まず一点目であるが、投影行為に力点があり投影自体を描く場合、「パンチ」が映されることが多い。【図7】人形劇パンチ＆ジュディでは、追及を逃れるパンチがヘクターと呼ばれ



【図7】シルエット幻灯で映る「パンチ」

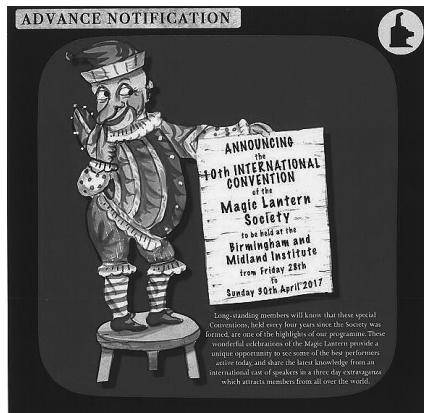


【図8】映るのは馬ヘクターで逃走するパンチ

る馬に乗り逃走する。少年誌に連載された「視覚娯楽」頁の口絵として使われ続けたのは、少年が(大人でなく)幻灯を投影する様子。投影されたのが馬ヘクターで逃走するパンチの幻灯種板であった¹⁷。【図8】

スクリーンに現れたのが「パンチ」であったのは、「パンチ」が人気者だから、という単純な話ではない。トム・ガニングの考察を借りると¹⁸投影するための器具=アパレイタス、ならびに投影する行為自体が重要であるならば、スクリーン上に何が現われるかは二次的である。映っているものに注意を引くよりは、映写技師役少年のスマートで誇らしげな様子や観客の沸く様子、アパレイタスとしての幻灯機自体の存在感を御覧ください、という構図になる。投影行為自体に着目して描くならば、投影された図は脇役になる。馬ヘクターで逃走するパンチ、とは一目瞭然なので、これは何が映っているかと視線をひきつけることにはならないと考えるべきなのだ。

第二の特異点としては、種板のコンテンツ分類による「告知種板」に頻繁に登用される「パンチ」である。情報部分はその都度変わる。文字だけでは殺風景だから何かをあしらうとなると、花鳥風月も意匠になるが、「パ



【図9】The Magic Lantern Society 第10回国際大会2017年の情報を告知する「パンチ」



【図10】開会を告知する「パンチ」1880年頃

ンチ」も頻出した。【図9】

幻灯会の開会に用いる「告知種板」【図10】で、最初パンチは白紙をもって登場し、「ようこそ」の文字が別ガラスを滑り込ませるスリッパー細工【参



【図11】雑誌『パンチ』街頭エナメル広告の復刻

照 (II.) 1. ② ii] で挿入される。変化形として、巻物を持って登場し、ほのかれた巻物をスリッパー細工で告知として示す、など思い浮かぶ。

それまでも、雑誌『パンチ』の永らく続いた表紙(1844-1954年)では、巻号刊行日時部分を更新していた。【図11】紙メディアで「告知」役だった「パンチ」を、幻灯種板においても同様に告知役として使ったわけだ。

以上二点を、種板文化の中に見てとれる「パンチ」の特異性についての覚書とする。

②種板分類と「パンチ」

ここでは種板の標準的な分類に従い幻灯文化を概観する。英国で種板を分類したジョン・バーンズの22分類¹⁹を、i. パノラマ種板、ii. 細工種板、iii. スタンダード種板の3類にあらためて大別し²⁰検討する。「パンチ」は、いずれにおいても現れるので、「パンチ」を借りて種板の説明ができるこ



【図12】パノラマ種板になるパンチ&ジュディ

とを示す。

i. パノラマ種板

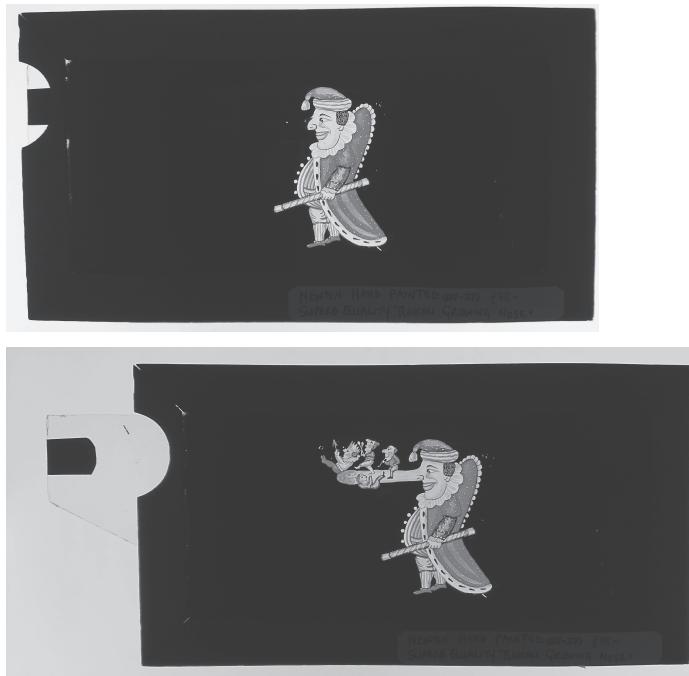
横長の種板を引くことで投影を継起的に変化させ、見世物のパノラマのように連なる映写を見せる。コミックを表現するのに「パンチ」を借りた例は多い。キャラクター紹介を省くことができ、いきなりコミックに導ける利点がある。ストーリーも幻灯師の思うままに構成できそうだ。「パンチ&ジュディ」とラベルの貼られた4枚組のうち、わかりやすい例を1枚示す。【図12】仰向けに倒れる敗色濃いジュディ。きっと赤ん坊はもう放り出されたのだろう。優勢のパンチ。場につきもののトービー犬。(両端の図は謎)

ii. 細工種板

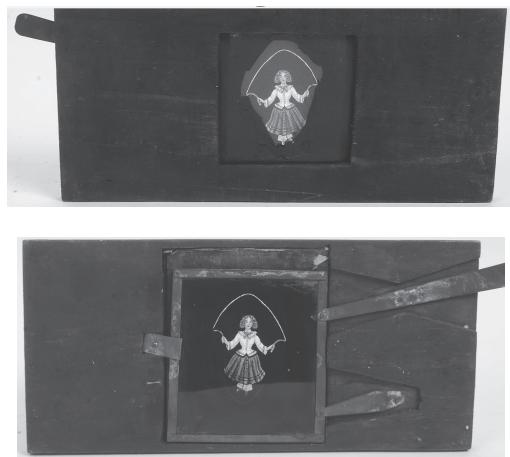
細工種板こそ、分類者バーンズの興味関心の主眼であった。重ねた種板をずらすスリッパー、レバー、ピボットで別種板を動かすタイプ、あるいは手回しハンドルで種板を回転させるラックワークなどの形態や組み合わせにより20に細分化した²¹。

細工種板の例を見ると、笑いをとりたい時に「パンチ」が大いに働いたとわかる。怪異な容貌を活かし、スリッパーの鼻が延びる種板は流通量が多く人気だったことがわかる。【図13】の左に見える黒塗りスリッパーガラスを引くと、次々に鼻で遊ぶ計4人が現われる。ポーズも衣装も変化に富み凝っているだけに、類似品の中では高価である。

レバータイプでは縄跳びが各種作られた。【図14】フランスの「パンチ」ポリシネールとアルルカンが縄を廻しコロンビースに跳ばせている1850年



【図13】スリッパー種板「パンチの延びる鼻」ニュートン社製刻印有、1913年以前



【図14】縄跳びレバー種板の仕組



【図15】ラック種板例「子どもの見るクリスマスの夢」豊穣の角から落ちる「パンチ」

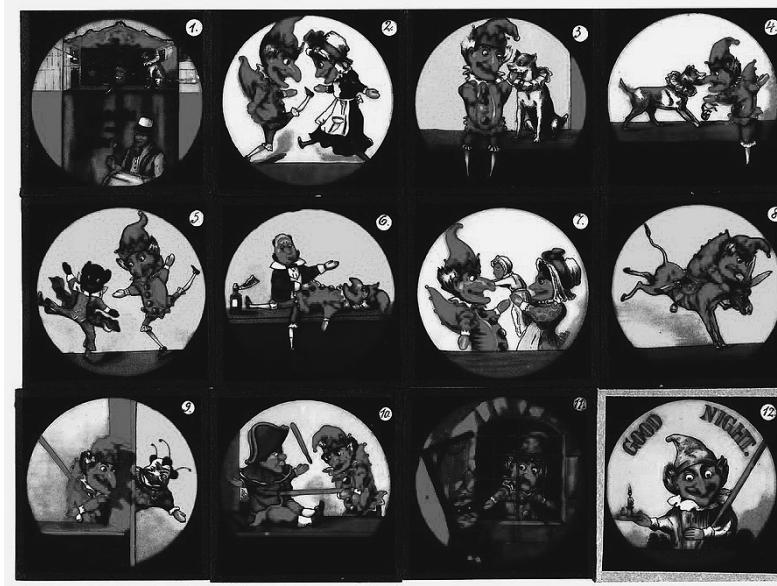
頃フランスの種板も報告されている²²。【図15】はハンドルを回すことで細工種板が回転するラックワークの例である。サンタが抱える豊穣の角から、おもちゃの一つとしてパンチ人形も落ちてくる。

iii. スタンダード種板

流通数では圧倒的に多い定型種板には、バーンズは興味を示さず、分類の最後で冷淡に次のようにふれている。「1880年以降に製造された幻灯種板の多数はこのタイプ」で、「3.25 インチ(83mm)四方のガラス板二枚の間に紙を挟み四辺を粘着性紙片で綴じる」が、挟む紙とは「たいてい写真…またはクロモリグラフィー」であった²³。大量生産に向く製法である。

聖書や童話など多彩な物語を見せるセットが、付属台本も作成され、売り出されるのみならず、貸し出しあれど、豊かな幻灯文化をつくりあげた。パンチ&ジュディの例としては、シアボルド社のシリーズの一つになり、12枚セットが作成された。【図16】

1枚目のタイトル種板は、色彩豊かに観客を高揚させる。最後12枚目は幻灯会が暗がりのなか、夜のものであるだけに効果的な「おやすみ」「おしまい」になっている。これだけで「告知種板」に転用することも可能である。12枚中の10枚で、人形劇パンチ&ジュディにのっとる物語を展開している。



【図16】シアボルド社パンチ&ジュディ12枚セット 1893年以前

2. 映画へあと一歩の幻灯での「パンチ」

バーンズの分類では、その他大勢の iii. スタンダード種板の一例にすぎないが、映画への強いベクトルが感じられる点で、特に考察の対象とする①ライフモデル種板、②ディゾルヴ種板²⁴をパンチ&ジュディから紹介しておく。

①ライフモデル種板

ライフモデル種板とは、しかるべき背景のもとに、ふさわしい衣装をまとったモデルがポーズをつけ一枚、場面やポーズを替えてまた一枚と撮影された複数の種板を、順に投影することで物語を構築する。産出は英国と米国に限られ、英国でも製造は10社くらい、なかで大手は2社と限定的であった。現物が残っていない場合でも、製品カタログに記載されたタイトルが手がかりになる²⁵。

【図17】は、センチメンタルな詩作品で人気を博したジョージ・ロバート・シムズ ‘Fallen by the Way’ 「道端で倒れて」の一枚である。いまわのきわの



【図17】ライフモデル種板例「道端に倒れて」©Keith Ellis

ボトラー集金係が、羽振りの良かった頃の思い出を上演者に語り、トービー犬をいたわり、先立ったパートナーとのあの世での再会を念じ、商売道具の笛・太鼓とともに葬られることを望む。製造元不明だが、バンフォース社カタログに1909年朗誦用22枚組があり、その17枚目「さあ、あの道に箱舞台を置こう。月も照らしてくれるさ」に相当するかもしれない²⁶。

パンチ&ジュディの箱舞台にエドモンズの家名と本拠地だったチェスターがあることから、曾祖父henry・エドモンズゆかりのはず、と曾孫にあたるキース・エリスが名乗りでた²⁷。モデルを務める人物名は不明だが、エドモンズ家の者かもしれない。

バンフォースの本拠地ホームファースからエドモンズ家が居住したチェスターまでは、現在、車を使っても1時間半程度の距離があり、協力関係を結ぶにはやや微妙な離れ具合だ。ポピュラーな話の一場面をライフモデル種板の流儀でエドモンズが作成したのかもしれない。またあるいは別の個人がエドモンズ家の協力を得て創ったのかもしれない。

②ディゾルヴ種板

ディゾルヴとはフェイドアウトにフェイドインで画像を重ねる手法で、映像ではおなじみのつなぎのテクニックである。静止画である幻灯種板が季節のうつろいや時間の経過を表現でき、夢、幻想、思い出を見せること



【図18】「見世物師の夢」©Kent MOMI

が可能になった。映画に近づいたのだ。

上記①でふれたシムズ「道端で倒れて」17枚目「さあ、あの道に箱舞台を置こう。月も照らしてくれるさ」に続く18枚目「ああドクドク血がめぐる——そうだ。ああパンチ！いつものだ」²⁸に相当する部分を、ディゾルヴで幻影を出している例が【図18】‘A Showman’s Dream’「見世物師の夢」である。‘Dying showman: vision’²⁹種板が、はたして、これに相当するかどうか、そもそも別物なのか、は今後の検討を待つ。

3. 初期映画に現れる「パンチ」

①フィクション映画「パンチ & ジュディ」

英国で製作された映画をフィクションとノンフィクションに分け、時系列に沿い附番すると、1898年10月00159番に「パンチ&ジュディ」が次のようにクレジットされている。

00159

PUNCH AND JUDY (65)

European Blair Camera Co.

Act (2 scenes) Puppet performance.³⁰

このフィルムは現時点では不明であるが、問題点を記しておく。まず、映画史のなかでこの時点をどうとらえるか？早いと見るか遅いと見るか？1895年12月にパリでリュミエールが映画を公開し、翌96年2月にはロンドンでも披露した。まもなく英国で作られた映画もR.W.ポールによって上映された。フィクション映画「パンチ＆ジュディ」公開は、その2年半後である。

さらに興味深いのは、これが海浜やストリートでの上演を撮影したノンフィクションではないという点だ。パンチ＆ジュディをフィクション映画にしたということは、撮影者の側から人形劇上演者に対してなんらかの指示を出し演出したとの前提がある。まず、上演の長さは実際の人形劇上演より大幅にカットしないと、当時のフィルムの尺におさまらない。

また、二場面構成とあるが、どの場面を撮ったのか興味深い。なぜならば、マイヒューがインタビューしたパンチ師も人形劇パンチ＆ジュディは二場面構成が原型ととらえているからだ[参照 (I.) 3.]。映像作品として人形劇パンチ＆ジュディを短いフィルム一本にした、と考えられるので、ヴィクトリア朝のぶくぶくしがちな上演を編集した演出への興味は尽きない。

②映像の魔術師メリエス作品での「パンチ」

ジョルジュ・メリエスはフランス人ながら、1887年には戯画「イギリス人メリエス」が描かれたほどに英國繫がりが顕著であった³¹。1884年、今の日本の新卒の年齢のほぼ1年間、家業の駐在員としてメリエスはロンドンに滞在していた。映画はまだ誕生しておらずミュージック・ホールが盛んな頃で、稀代の興行師マスケランが仕切るエジプシャン・ホールに、メリエスは通いつめた。帰国後、家業からは手をひき、パリではよく知られるウーダン劇場を購入し、奇術などを自らも見せる興行師となった。やが

て、新発明の映画に魅せられて、製作に乗り出すことになった³²。

i. 「パンチ＆ジュディ」と呼ばれた「人形劇場でハチャメチャ」‘L’Anarchie Chez Guignol’ 1906 (838-9番)³³【図19】

イタリア古典劇コメディア・デラルテに由来する登場人物は、メリエスにとって身近で使いやすかったようで、何本もの映画に残している。ピエロ、アルルカン、コロンビーナなどフランス化した一族をはじめ、プルチネッラのフランス版ポリシネールは直接「パンチ」につながる。人形劇においてポリシネールは中心的キャラクターであった。直訳すれば「人形劇場でハチャメチャ」、邦訳は「ハチャメチャ人形劇」³⁴だが、アメリカでメリエス作品集が出された時には「パンチ＆ジュディ」と訳がついた³⁵。いさかミスリーディングな英訳に基づくが、ポリシネールを「パンチ」と見てしまう英語圏のまなざしは明白である。

本作はヴィクトリア女王逝去後の作品であるが、メリエスが生活し吸収したのはヴィクトリア朝の英国文化であったことから考察対象とする。

フィルムは当時の平均の長さの4分の1、30秒ほどしか残っていないが、これまでのメリエス作品になじんでいれば、展開はある程度想像できる。下手にはいかにもフランスの人形劇舞台がおかれ、見えるのがポリシネール。目を引くのが、観客席と舞台の間、何もない中央。観客が女の子ばかりで揃いのドレスを着ている…となると、何かのきっかけでこの女の子た



【図19】メリエス「人形劇場でハチャメチャ」英訳「パンチ＆ジュディ」1906年

ちは、アナーキーにハチャメチャに、舞台中央を埋めつくしてロケットダンスを始めるだろう。メリエスの本拠地ウーダン劇場や、かつてロンドンで楽しんだミュージック・ホールの舞台さながらの見せ場が映画になったはずだ。

ii. 「パンチ」従兄ポリシネールが活躍する映画

他にもメリエスがポリシネールに活躍させているフィルムを二本紹介しておくる。

「魔法の本」‘Le livre magique’ 1900 (289-291番)。絵本を繰ると、おなじみのポリシネール、アルルカン、ピエロ、コロンビーナが次々に飛び出してくる。お互いにちょっとからんで騒ぐがまた、本の中に戻っていく。

「クリスマスの夢」‘Rêve de Noël’ 1900 (298-305番)。翌朝の贈物を楽しみに眠りにつく子ども。ありったけの華やかな夢のなかでは、柱にポリシネールが飾られている。そのうちに、みなが踊り出す。ポリシネールはセンター位置で、帽子がふっとんでも踊りつづける。

iii. 映画「幻灯」の「パンチ」‘La lanterne magique’ 1903 (520-4番)。【図20】

ポリシネール「パンチ」たちが幻灯を上映する様子を撮っている。ところが、幻灯が映しだすのが「映画」になっているのだ。まさに幻灯と映画の両メディアを連続的に生きたメリエスならではの作品で、幻灯と映画という二つのメディアが分かちがたい投影文化であることを示す映画になった。「幻灯のごく自然な展開として…舞台上に顯れた映画」³⁶をメリエスがつかまえた映画「幻灯」に「パンチ」は場を占めた。



【図20】メリエス「幻灯」1903年

おわりに

パンチ&ジュディが人びとの身近にあり、もっともポピュラーであったのがヴィクトリア朝だろう。とはいえ、今日のものとの相違点をふまえ、ヴィクトリア朝パンチ&ジュディを想像し近づくことが第一歩であった。今よりもくすんだ色彩の舞台で、活躍するキャラクターの数もずっと多く、上演時間も長かったのだ。

ヴィクトリア朝の娯楽として大きな存在であるスクリーン投影においても、幻灯を楽しむ機会には様々なパンチ&ジュディがあったことは、残された種板に明らかである。世紀末、映画が生まれてのちは、この新しい芸術様式にもパンチ&ジュディはからんでいった。人形劇として閉じず、文化の営みに関わっていった例をヴィクトリア朝投影文化に見ることができた。

この後誕生したメディアや芸術様式にもパンチ&ジュディは場を占めていくが、それについては稿をあらためて考察していきたい。

註

- 1 野中涼「Punch and Judy」『英語青年』研究社（1974）119: 11, 764-5.
- 2 鶴見俊輔「パンチとジュディ」『太夫才蔵伝』平凡社, 1979; 2000, 263.
- 3 水田外史『人形つかい五十年』ポプラ社, 2000, 156.
- 4 水田外史『ガイ氏のくぐつ袋——人形づかい修業五十年の道のり』晩成書房, 2000, 175.
- 5 岩田託子「日本におけるパンチ&ジュディ再考」『'20 日本人形劇（日本本人形劇年鑑 2020 年版）』NPO 法人日本ウニマ編, 2021, 49-52.
- 6 ウィリアム・ジョンストン, 小池和子訳『記念祭／記念日カルト』現代書館, 1993.
- 7 Bil Baird, *The Art of the Puppet* (New York: The Macmillan Company, 1965), (86)-(88).
- 8 岩田託子「はじめに——日本におけるパンチ&ジュディ」ロバート・リーチ『パンチ&ジュディのイギリス文化史』昭和堂, 2019, xix-xx.
- 9 Henry Mayhew, *London Labour and the London Poor* Vol.III (1851, 1861-2; London: Frank Cass, 1967), 45-46.
- 10 Blanchard Jerrold and Gustave Doré, *London: A Pilgrimage* (1872; London: Anthem Press, 2005), 205-209.

- 11 Henry James, "Preface" *The Tragic Muse: The Novels and Tales of Henry James* Vol.7 (1908; New York: A. M. Kelley, 1970), x.
- 12 Henry Mayhew, 49, 53.
- 13 スクリーン・プラクティスの概念については、Charles Musser, "Toward a History of Screen Practice," *Quarterly Review of Cinema Studies* 9:1 (Winter 1984), 59-69.
- 14 岩田託子「英国で映画が始まる頃——（1）映画に先立つ幻灯文化——」『国際学部紀要』中京大学（2022）4号, 1-22.; 「（2）幻灯と映画と 1. パンフォース」（2023）6号, 1-29.; 「（2）幻灯と映画と 2. 幻灯と映画の交差点」（2024）7号, 1-19.; 「最盛期英国幻燈文化をおもちゃ映画ミュージアムコレクションに見る」『Toy Film Museum マジック・ランタン～さまざまな幻燈の楽しみ』京都映画芸術文化研究所（2023）9, 10-24.
- 15 ジョルジュ・サドゥール 『世界映画全史』（東京：国書刊行会）2卷（1993）20-21.
- 16 岩田託子「メディアのなかのパンチ（二）雑誌『パンチ』のなかのパンチ＆ジュディ」『文学部紀要』中京大学（1993）28卷, 2号, pp. 48-86.
- 17 *The Boy's Own Book* British Library デジタル版 1849年 423頁.
<https://books.google.co.uk/books?hl=ja&id=-ydcAAAAcAAJ&q=optical+amusement#v=snippet&q=optical%20amusement&f=false> Accessed 31 August 2024.
- 18 Tom Gunning, "The Cinema of Attraction[s]: Early Film, Its Spectator and the Avant-Garde," *The Cinema of Attractions Reloaded*, edited by Wanda Strauven, Amsterdam University Press, 2006, p. 383. JSTOR, <http://www.jstor.org/stable/j.ctt46n09s.27>. Accessed 24 Jul. 2022.
- 19 John Barnes, "Classification of Magic Lantern Slides for Cataloguing and Documentation," Dennis Crompton, David Henry and Stephen Herbert eds., *Magic Images: The Art of Hand-painted and Photographic Lantern Slides* (London: The Magic Lantern Society, 1990), 75-84.
- 20 岩田託子「英国で映画が始まる頃——（1）映画に先立つ幻灯文化——」, 3-4.
- 21 John Barnes, 75-84.
- 22 Laurent Mannoni, translated by Richard Crangle, *The Great Art of Light and Shadow* (1995; Exeter: University of Exeter Press, 2000), Fig.36, 289. タイトルのみで種板は不明だが Lucerna Magic Lantern Web Resource, lucerna.exeter.ac.uk, item 5058033. Accessed 27 April 2024.
- 23 John Barnes, 84.
- 24 "Life Model slides," *Encyclopaedia of the Magic Lantern* (London: The Magic

- Lantern Society, 2001), 172.; Leora Wood Wells, "From Slide To Film: A Dissolving View," *ML BULLETIN (The Magic Lantern Gazette)* (1979), 1:2, (1)-4.
- 25 岩田託子「英国で映画が始まる頃——（2）幻灯と映画と 1. バンフォース」, 3.
- 26 Lucerna Magic Lantern Web Resource, *lucerna.exeter.ac.uk*, item 5012173. Accessed 19 March 2024.
- 27 Keith Ellis, Facebook, 20 June, 2021. <https://www.facebook.com/groups/326430500779345/search/?q=the%20Edmonds> Accessed 17 March 2024.
- 28 Lucerna Magic Lantern Web Resource, *lucerna.exeter.ac.uk*, item 5012174. Accessed 19 March 2024.
- 29 E.G. Wood 社製, 効果種板が一枚以上、1894 年か、それ以前製。(at least 1 slide, in/before 1894) Lucerna Magic Lantern Web Resource, *lucerna.exeter.ac.uk*, item 3010987. Accessed 19 March 2024.
- 30 Denis Gifford, *The British Film Catalogue: Fiction Film. 1895-1994*, 3rd. ed. (1973; London: Fitzroy Dearborn Publishers, 2001), 8.
- 31 戯画「イギリス人メリエス」1887. Madeleine Malthête-Méliès, *Georges Méliès: L'enchanteur* (1973; Mesnils-sur Iton: la tour verte, 2011), (68).
- 32 岩田託子「英国で映画が始まる頃——（2）幻灯と映画と 幻灯と映画の交差点——」, 7-11.
- 33 メリエス映画については邦題、原題、製作年につづく丸括弧内にメリエスの映画製作会社スター・フィルム社の附番を記す。
- 34 マドレーヌ・マルテット=メリエス、吉賀太訳『魔術師メリエス』フィルムアート社、1994, 490.
- 35 *Georges Méliès: DVD Filmography* (Flicker, 2008) 添付冊子.
- 36 David Robinson, "A Film-Maker's Magic Lantern Years," *New Magic Lantern Journal* (1993) 7:1, 11.

図版出典一覧

- 【図 1】 Bil Baird, *The Art of the Puppet* (New York: The Macmillan Company, 1965), (86)-(87).
- 【図 2】 筆者撮影
- 【図 3】 <https://bryan-clarke.co.uk/> Accessed 30 August 2024.
- 【図 4】 <https://bryan-clarke.co.uk/puppets/piccini%20punch> Accessed 30 August 2024.
- 【図 5】 <https://collections.vam.ac.uk/item/O103069/puppet-codman-family/> Acc

- essed 30 August 2024.
- 【図 6】 <https://www.gettyimages.co.uk/detail/news-photo/punch-and-judy-1872-from-london-a-pilgrimage-by-gustave-news-photo/1187595621>
- 【図 7】 東京都写真美術館
- 【図 8】 <https://books.google.co.uk/books?hl=ja&id=-ydcAAAAAcAAJ&q=optical+amusement#v=snippet&q=optical%20amusement&f=false>
Accessed 31 August 2024.
- 【図 9】 <https://www.magiclantern.org.uk/conventions/10-2017-04-28.php>
Accessed 30 August 2024.
- 【図 10】 Steve Humphries, *Victorian Britain through the magic lantern: illustrated by Lear's magical lantern slides* (London: Sidgwick & Jackson, 1989), n.p.
- 【図 11】 筆者撮影
- 【図 12】 筆者撮影
- 【図 13】 筆者撮影
- 【図 14】 <https://www.antiq-photo.com/en/collections/museum/pre-cinema-2/mechanical-lantern-slide-skipping-rope/> Accessed 30 August 2024.
- 【図 15】 <https://www.youtube.com/watch?v=vfzhoRRZzq4>
Accessed 30 August 2024.
- 【図 16】 筆者撮影
- 【図 17】 <https://www.facebook.com/photo/?fbid=3905902172840539&set=gm.4129852387103785> Accessed 30 August 2024.
- 【図 18】 By courtesy of Kent MOMI
- 【図 19】 *Georges Méliès: DVD Filmography* (Flicker, 2008).
- 【図 20】 *Georges Méliès: DVD Filmography* (Flicker, 2008).

第23回 シンポジウム ヴィクトリア朝の／と人形（劇）パネル 「パンチ＆ジュディのヴィクトリア朝」の報告。3部構成であったシンポジウム発表での第1部・第2部に相当する。第3部「パンチ＆ジュディとヴィクトリア時代に日本に生まれた英学者たち」は稿をあらためてまとめたい。

Summary

The Victorian Era and the Punch and Judy Show

Yoriko Iwata

The history of the Punch and Judy show extends almost 400 years, which means the Victorian era occupies only a part of the whole, although it is the period during which the puppet play enjoyed its greatest popularity in British culture.

Two points are to be discussed in this article: (I.) the characteristics of Victorian Punch and Judy; (II.) Punch in “screen practices” both in magic lanterns and early films.

(I.) The characteristics peculiar to the Punch and Judy show in the Victorian period: 1. pale and bare wooden puppets; 2. street corner venues; 3. large, loose, baggy shows.

(II.) The Punch and Judy show in the Victorian screen practices both in magic lanterns and early films: 1. magic lanterns ① frequently projected popular ‘Punch’; ② ‘Punch’ in various types of slides; i. panorama slides, ii. mechanical slides; iii. standard slides; 2. from magic lanterns to films; ① life model slides, ② dissolve slides; 3. ‘Punch’ in early films ① a British fiction film; ② several short films by Georges Méliès featured the French counterpart of ‘Punch’: i. ‘L’Anarchie Chez Guignol’, ii. ‘Le livre magique’, ‘Rêve de Noël’, iii. ‘La lanterne magique’. As Méliès stayed in Victorian London in his youth for about one year, and spent a lot of time in music halls, for example, Egyptian Hall, it is to be concluded that Victorian culture had influenced him to a remarkable extent.

Insights into why this cultural hero ‘Punch’ has survived for so long

provide positive receptions of the Punch and Judy show.